ヨハネによる福音書 6 章 16〜33 節

今月は、10 月にお休みを頂いたため、8 月に続く学びとなります。加えて、聖書の箇所は 6 章 16〜33 節で、8 月直後の同 1〜15 節を跨ぐかたちになっています。これは、同箇所を以前（2017 年 4 月）すでに学んでいるためで、この間、間がだいぶ空いてしまいました。今月は、そんな少々分かりにくい連続になっています。

したがって、今回は、直前の 6 章 1〜15 節を念頭に置きつつ、これをいま一度 振り返りながら学びを進めたいと思います。なお、今回は、16〜21 節がその前半、22〜33 節がその後半となります。

16〜21 節（前半）

前半は「湖上の奇跡」と呼ばれ、二千年の長きにわたり、教会に連なる人々の慰めと力の源泉となってきたところでもあります。マタイ、マルコの両福音書もこれを記していて（マタイ 14：22〜33、マルコ 6：45〜52)、いわゆる並行記事とされています。これらをあわせ読んで、事の全体をいま少し丁寧に再現してみると、次のようになります。

出来事の全容

・マタイ（14：22)、マルコ（6：45）を見ると、「イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸・・・へ先に行かせ」と記されています。弟子たちは、自分たちで舟に乗ったのではなく、イエスに強いて乗せられたのでした。

〔参考〕「向こう岸へ」：五千人の給食の丘（ガリラヤ湖畔の北端東側、ベトサイダ付近？）から対岸へ（同湖畔の北端西側、カファルナウムの会堂へ)。(「聖書地図」参照)

・イエスはなぜ、弟子たちをその場から去らせようとしたのでしょう？ その意図は何だったのでしょう？（参照 ヨハネ 6：15)

・ここに、出来事の重要な背景があるように思われます。

・そのうえで、マタイ（14：22〜23）は、「イエスは・・・その間に群衆を解散させられた。群衆を解散させてから、祈るためにひとり 山にお登りになった」と語っています（マルコの並行箇所は 6：45〜46)。

・イエスはおそらく、後から湖の岸を歩いていって 向こうで合流するから、とでも言われて、弟子たちをカファルナウムに向かわせたのではないでしょうか。

・こうして、弟子たちは舟を出しました。

・ところが、「強い風が吹いて、湖〔が〕荒れ始め」ます（18)。ガリラヤ湖はさほど大きくなく、しかも、周囲を山や丘に囲まれています。そのため、天候しだいで突然 突風にみまわれ、湖面が大

きく波立ちました。

・弟子たちは、岸からすでに「二十五ないし三十スタディオンばかり漕ぎ出し」ています（19)。およそ 5 キロで、すでに、湖の中ほど 四分の三ほどの所にいたと思われます。戻るに戻れず、荒波に翻弄されていました。

・が そのとき、山で祈っておられたイエスが弟子たちの苦境に目を留められます。

・6 章の 4 節を見ると、時は過越祭間近の頃で、満月に近い夕べであることが分かります。風も吹いて、雲も払われたことでしょう。とすれば、満月に近い月が夜空に皓々と照っていて、イエスはその月明かりのもと、波に弄ばれる弟子たちの姿を眼下に見られた。そこで、山を下り、弟子たちのもとに急がれたのではないでしょうか。

〔参考〕過越祭：ニサンの月（ユダヤ暦の第 7 月）の 14 日（太陽暦の 3 月末から 4 月初めごろ）に祝われた。

・そして 19 節、20 節、「湖の上を歩いて舟に近づ」き、「言われた。『わたしだ。恐れることはない』」

・すると 21 節、「間もなく、舟は目指す地に着いた」と、ヨハネの福音書は記しています。

・これが、今月の前半部分の全容です。

何がどう、慰めと力の源泉に？

・これが 長きにわたり 教会に連なる人々の慰めと力の源泉となってきた湖上の出来事ですが、人々はそこにいかなるメッセージを読み取ったのでしょうか。

1.「舟」（17、19、21）とはいったい、何を意味？：キリスト教会を表わすシンボルの一つとしてしばしば 舟が描かれますが、それはいったい、どんな意味合いからでしょうか。

2.「湖」（17、18、19）はいったい、何を象徴？

3.「強い風」（18）とは？

4.「荒れ始めた」（18）とは？

5.「彼らは恐れた」（19）「わたしだ。恐れることはない」（20）とのやり取りに、信仰の何を読み取る？

6.「目指す地」（21）とは、どんなところ？

7.「すると間もなく・・・着いた」（21）とは、信仰の何を示唆？

ヨハネならではの構成とその視点

ところが、マタイ、マルコ、ヨハネの 3 つの福音書を読み比べてみると、一読して気づかされることがあります。それは ― 細かなことはさておき ―、湖上の箇所を挟んだ前後の展開に顕著な違いが見られることです。つまり、マタイとマルコは同じものの、ヨハネがそれらとは明らかに違っていることです。

構成の対比

・どこがどう違っているかといえば、五千人の給食から湖上の出来事を経て 対岸の地に渡った後(あと)の、その後(ご)の記述です。

〈マタイ〉〈マルコ〉 **〈ヨハネ〉**

五千人の給食（共通）

↓

湖上の出来事（共通）

↓ ↓

（ゲネサレトでの）病人の癒やし （カファルナウムの）会堂でのやり取り

＊ゲネサレトはカファルナウムのすぐ南 ＊カファルナウムはゲネサレトのすぐ北

（ティベリアスの北）

＊簡略な報告風 ＊長々とした記述

（ゲネサレトとカファルアウムは隣接しているので、
イエスの一行(いっこう)が一帯を回られたとき、
そこで同じころになされたものと考えられる）

・一見して分かるとおり、マタイとマルコが 奇跡（五千人の給食）から奇跡（湖上の奇跡）へ、そしてまた奇跡（病人の癒やし）へと繋(つな)げていて、その展開がスムーズなのに対し、ヨハネは最後の締めのところで、奇跡ではなく 会堂でのイエスの教えを記しています。

ヨハネの視点はどこに

・どう見てもスムーズな移行とは言いがたく、違和感さえ感じさせる こうした組み立てを、ヨハネはどんな意図で行なったのでしょうか。ヨハネが提示したかった視点とメッセージの中心は はたして、何だったのでしょうか。

・そこに見られるのは、五千人の給食にあずかって イエスの後(あと)を追った人々が ― 加えて、同様の期待を持って、ティベリアスからこれに合流した人たちも ― そのすぐ後(のち)、対岸のカファルナウムで態度を一転。イエスの言葉を受け入れない者たちが多く出たという事態です。

・言い方を換えるなら、ヨハネの場合、五千人の給食と内容的に繋(つな)がっているのは、湖上の奇跡というより、カファルナウムの会堂でのやり取りのほうで、対比的な文脈でそのように繋がれているのではないでしょうか。

・そもそも、間に挟まれた湖上の奇跡の記述は、マタイとマルコがそれを丁寧に記していて その重みが感じられるのに対し、ヨハネのそれはいかにも簡略で、どこか ナレーション的な挿入の感すらします。マタイとマルコに比べ、その比重がやや軽く感じられはしないでしょうか。

・展開の不自然さという意味では、湖上の記述こそが唐突、と言うべきなのかもしれません。

・こうした全体からして、ヨハネ福音書の論じる中心的ポイントはどこにあると考えられるでしょうか。

・ということで、前半部分については ― マタイとマルコのほうが、記述がより詳細ということもあ

り ―、今回は伝統的な講解の紹介にとどめさせていただきたいと思います。
・今回は、後半部分（22～33 節）に主眼を置くことにします。

22～33 節（後半）

後半は、「その翌日」(22) との言葉から始まっています。ガリラヤ湖の丘の上でなされた五千人の給食の出来事の、その翌日ということです。イエスは弟子たちを向こう岸のカファルナウムに向かわせた後、御自分は群衆を解散させ、山に退いて 父なる神との交わりの時をお持ちになられました。後半の記事はこれに続く出来事を記したもので、安息日にカファルナウムの会堂で礼拝をまもられた折のことと考えられます。

背景と経緯（22～24）

・パンと魚の奇跡を目にした群衆たちは、一部がその場に残って 夜を明かしたのでしょう。
・彼らは、舟が一艘しかなかったこと、しかもイエスはそれに乗り込まれず、弟子たちだけが乗って 向こう岸へと向かったことを見ていたものと思われます。
・ですから、彼らは、イエスがまだ近くにおられ、夜が明けたらまた会えると思って、そこで夜を明かしたのではないでしょうか。
・ところが、朝になっても、イエスが姿を現わされる気配はありません。
・そうこうしていると、向こう岸のもう一つの町ティベリアスから、小舟が数艘、彼らのもとにやってきました。
・そして、群衆も彼らも、イエスと弟子たちが揃って もはやそこにはいないことに気づきます。
・そこで、一同は皆、慌てて舟に乗り、イエスを捜しに向こう岸のカファルナウムに向かったのでした。

群衆たち：「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」(25)
イエス：「<u>はっきり言っておく</u>。あなたがたがわたしを捜しているのは、
<u>しるしを見たからではなく</u>、パンを食べて満腹したからだ」(26)

・こうして、群衆はカファルナウムの会堂でイエスを見つけます。そして、言います。「ラビ〔すなわち、先生〕、いつ、ここにおいでになったのですか」(25)
・ここには 彼らのどんな思いが滲み出ていると感じられるでしょうか。
・しかし、イエスはそれには直接 答えられません。なぜなのでしょう？
・イエスは代わりに、こう語られます。「はっきり言っておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ」(26)
・「はっきり言っておく」(26) とは、原語のギリシア語で "ἀμὴν ἀμὴν"（アメーン アメーン）となっている表現です。私たちの言うところの「アーメン、アーメン」で、
① 大切なことを言われるときの言い回しであり、かつまた
② 聞き手が予期せぬことを語られるときの言い回し

でもあります。

・ここでは はたして、そのどちらでしょうか。そして、その言わんとするところは？

・これを読み解くかぎは、「しるしを見たからではなく」(26) との 続く言葉にあるのではないでしょうか。

・すなわち、

① しるしというのは、見えるその背後に それ以上の大切な事柄が隠されているもので、

② あなた方が食したパンと魚(さかな)は我が父なる神の思いを表わす、そのようなしるしなのに、

そのしるしが意味するところを あなた方は・・・しようとしない、というふうに。

・私たちはここから、信仰にとって大切などんなことを学び取るよう期待されているのでしょうか。

「朽ちる食べ物のためではなく、
いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。
これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。
父である神が、人の子を認証されたからである」(27)

・そのようにして、イエスが続けられた言葉がこれでした。

・「人の子」とは、新約では多くの場合 救い主を意味し、―受難、罪を赦(ゆる)す権威、受くべき栄光との関連で―イエスが繰り返し、御自身の呼び名として用いられた呼称です。

・また、「認証」というのは、指輪に彫り込んだ印鑑などで押す 証明の印のことです。該当の箇所に溶かした蠟(ろう)を垂らし、その上に押印(おういん)をします。聖書の時代には 蠟の代わりに粘土を使うこともありました。

・要は、書面にされたものの所有権や記載内容の確認、同意を保証するものですが、

・ということは、イエスは つまりは、―父なる神と御自身との関連で―何がどうだと言われたのでしょうか。

「それでは、わたしたちが見て あなたを信じることができるように、
どんなしるしを行(おこな)ってくださいますか。
どのようなことをしてくださいますか。
わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。
『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです」(30、31)

・とはいうものの、群衆はそう易々(やすやす)とは説得に応じません。「ならば・・・」と、条件を持ち出したのがこの返答です。

・「マンナ」(31) とは、エジプトを脱出したイスラエルの民が荒れ野を放浪した 40 年の間、天から与えられた食べ物でした。旧約聖書では「マナ」(出エジプト 16：31 他) と呼ばれています。

・「朝・・・露(つゆ)が蒸発すると、・・・荒れ野の地表を覆って 薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた」(同 16：13～14) と述べられているもので、それは「蜜の入ったウェファースのような味がした」(同 16：31) と記されています。

・イスラエルの人々はこれを「天からのパン」(同 16：4) と呼んでいました。
・そして、次に救い主が来られるときには そのパンをもう一度 与えてくださる、との信仰が受け継がれてもいました。ですから、群衆はそれを要求したのでした。
・しかし、皆さんはどう思われるでしょうか。ここでもしも、イエスが奇跡を行ない、彼らに天からのマンナを与えられたとしたら・・・。それを見た群衆の反応は・・・？
〔参考〕①群衆はすでに、五千人の給食を目の当たりにしていた。また、②26 節の「しるし」という言葉は、原文のギリシア語では単数形でなく、複数形（*σημεῖα*<*σημεῖον, -ου, τό*）で書かれている。ということは、群衆はそれまでにも・・・。
・群衆に問題があるとしたら、それは彼らのどんなところにでしょうか。
・そして、私たちはそこから、信仰の何を学ぶでしょうか。

「はっきり言っておく。
モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、
わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。
神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである」(32、33)

・イエスは しかし、求めに応じる代わりにこのように述べて、事の核心に触れられます（ここでもまた、イエスは「はっきり言っておく」と言っておられます：前記の解説参照)。
・すなわち、
①「天からのパン」(32) を与えたのはモーセではない。それは神であって、モーセはそれを取り次いだにすぎないこと。
② 神は、御自分の民を顧みてくださっているそのしるしとして、これをお与えになったこと。
③ そして、それは時至り、今や お腹を満たす肉のパンを超えて、「世に命を与える」(33)「まことのパン」(32) として「天から」(32) 与えられること。
そのことを、イエスは告げられたのでした。
・こうしたイエスと群衆との一連のやり取りを見るとき、そこに見て取れるのは両者のどんな食い違いでしょうか。人々の何がどうずれていたのでしょうか。
・イエスの下さる そのいのちにあずかりたいと願う私たちにとって、ズレのない 的を得た視点を持つことは大事なことではないでしょうか。

群衆：「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」(28)
イエス：「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である」(29)

・群衆の問いは、すぐ前の 27 節のイエスの言葉を受けたものです。
・神の下さる賜物を頂くには、なにがしか 神に受け入れられる良い行ないをしなければならない、と ユダヤ人の彼らはそう考えていました。
・そこで、あなたの言う朽ちない食べ物、永遠の命に至る食べ物を手にするには、神に受け入れられる どんな業をすればよいのか、と 彼らは尋ねたのでした。

・これに対し、神のもとから来たこの私を信じること、それが神の御心(みこころ)に適(かな)うことであり、朽ちない食べ物を頂く道である、と イエスはそう言われました。
・後半のメッセージの中心はここにあるとも思われますが、五千人の給食との対比の全体から考えるとき、それははたして どんなメッセージでしょうか。
・そして、ここでも見られる 群衆とイエスの間のズレとは？ また、そこから 私たちが学ぶべき信仰の事柄とはいったい、何でしょうか。
・そこには、信仰とそれに基づく生き方の本質に関わる問題が置かれているように思われます。しかも、生活の具体と絡み合うかたちで。